

歴史を往還する旅 瀋陽・延吉・大連

近代民衆史研究会第七次訪中団報告記

奥 武 則

時おり、激しい雷の音が聞こえてくる。小降りになったと思っていた雨がふたたび強く降り出したのか。

二〇〇四年八月二四日。時計は午後三時を少し回っていた。中国・撫順市郊外、平頂山殉難同胞遺骨館。今にも身震いが起きてきそうな異様な身体感覚を感じながら、私はそこにいた。

近代民衆史研究会第七次訪中団の旅は二日目に入っていた。「報告記」は本来、時間を追って書くべきだろう。だが、締め切り間近になってようやく重い腰を上げたとたん、あの日耳にした雷鳴とともに、ぞわぞわとした身体感覚が甦ってきた。

「骨池」と名づけられた幅五メートル、長さ八十メートルのスペースをめぐる。目の前に累々たる人骨がある。頭蓋骨、肋骨、背骨、長短さまざまの足や手の骨……。こんなにもまとまった人間の骨を見るのはむろん初めてだった。

母と子だろうか、一方の遺骨の左腕の骨がすぐ脇の小さな遺骨を抱くようにしている。夫と妻だろうか、一方の人骨の両腕の骨が隣の人骨の胸のあたりを抱え込んでいる。強く抱き合ったまま死んだのか。足を開いた長身の人骨がある。その頭蓋骨の口は大きく開いたままだ。苦悶の表情にも思えるし、虐殺への怨念をいま、そこで叫んでいるようにも見えた。

一九三一年九月一八日、柳条湖事件（中国では「九・一八事変」）によって満州事変が始まる。翌年三月一日、満州国が建国された。九月一五日、日本はこの傀儡国家を「承認」する。その夜、南満州鉄道（満鉄）が経営する撫順炭鉱が抗日ゲリラに襲われた。日本側が言うところの「匪賊」である。翌一六日、撫順守備隊は「匪賊」に通じていたとして平頂山村を襲った。以下、遺骨館で購入したパンフレットから抜書きする。日本語表記の乱れは原文のままである。

《……全村三千ぐらいの人人を全部平頂山ふもとに追い詰めてざんこくな虐殺をした。その後、日本侵略者は自分の罪行を隠すため、ガソリンで屍体を焚き、砲で山を崩れて遺体を深く埋めた》

いま遺骨館が建つ場所からは約八百体の遺骨が発掘されたという。第一層にはガソリンで焼かれた遺骨があった。これらは集めて埋葬した。いま「骨池」で目にする遺骨は第二層のもので、この下にも遺骨が埋まっているという。

平頂山事件は、本多勝一氏の「中国の旅」によって広く知られるようになった。本多氏は朝日新聞記者として一九七一年六月、中国各地で「南京大虐殺」などについて取材し、

近代民衆史研究会第七次中国ツアー

【日程】二〇〇四年八月二四日（火）～三〇日（月）

【団長】 稲田雅洋 【秘書長】 豊田文雄

【参加者】 赤上 剛 稲田敦子 井本公明 奥 武則

木村 勲 小林照子 櫻庭 宏 櫻庭禎子 佐々木啓之

高橋良子 堀幸一郎 毎沢信彦 森山誠一 渡邊則雄

八月から同紙に「中国の旅」を長期連載した。連載記事は翌年、同名单行本として朝日新聞社から刊行された。平頂山事件については「奇跡的な生存者のなかで、いまも生きている三人に会った」として、当時二十七歳だったという夏廷沢氏らの聞き書きを収めている。

帰国後、現地で感じた異様な身体感覚が持続する中で、事件の全容を知りたくなった。田辺敏雄『追跡 平頂山事件 満洲撫順虐殺事件』（図書出版社、一九八八年）と石上正夫『平頂山事件 消えた中国の村』（青木書店、一九九一年）を手にすることができた。その他の文献も含めて知りえたこと、考えたことは少なくない。だが、それらを記すのは「報告記」を大きく逸脱する。以下、田辺氏の労作を主な手がかりにして出来事の概要のみを紹介しておく。田辺氏は中国側の公式の見解だけでなく、同時代史料、日本人関係者の証言などを通じて、こうした結論にたどりついている。

一九三二年九月一五日夜、数百人の「匪賊」が三隊に分かれて撫順炭鉱の日本人社宅などを急襲した。激しい戦闘の末、「匪賊」側数十人、日本人五人（炭鉱職員は四人）の死者が出た。翌一六日昼過ぎ、撫順守備隊四十余人が機関銃（重機一、軽機三）を携帯してトラック三台に分乗して楊柏堡集落（当時は地元では「平頂山村」とは呼ばれていなかったという）に向かった。昼過ぎ、住民を集落外の一カ所に集め、重軽機で射殺した。同集落を搜索し、多くの家から「匪賊」とのつながりを示す証拠が見つかったというのが理由だった。一七日以降、部隊は遺体を処置するために再出動する。民間の防備隊多数もこれに加わった。製油工場からガソリン（石油、重油と書かれた文献もある）を運び、遺体を焼いた。その後、しばらくして現場の崖をダイナマイトで爆破して遺体を埋めた。

犠牲者はどれくらいいたのか。「満洲日報」（一九三二年一〇月一五日）には楊柏堡集落（記事では平頂山）の人口は千三百六十九人とある。集落は撫順炭鉱で働く「工人部落」だった。満鉄所有の同型の平屋の建物が二十数棟建っていたという。一棟に六～八世帯が居住し、一世帯六～九人とすれば、人口千三百六十九人は妥当な数字となる。九月一六日は平日で、工人たちは炭鉱に働きに出ていた。村には婦女子が多く残っていた。田辺氏は「正確な算定は困難だが、六百名を中央に前後二百名の幅を持たせれば、大きなズレはないのではないか」と記している。

この事件では国民政府の戦犯法廷で七人が死刑判決を受け、一九四八年四月一九日に執行されている。警察官一人と撫順炭鉱の炭鉱長以下職員六人である。炭鉱職員たちは最初の襲撃には加わっていなかった。これも帰国後に読んだ本だが、『もうひとつの満洲』（文藝春秋、一九八二年）の中で、澤地久枝さんは「直接の責任者たちは審判をまぬがれ、この事件に関しては無辜の多くの日本人が、同じ日本人（軍人）たちの罪障の身替りとなって死んだ」と記している。

一九九六年八月、生き残った三人が日本政府に対して損害賠償を求める訴訟を起こしたことにふれておくべきだろう。東京地裁は二〇〇二年六月二八日の虐殺の事実は認定したものの、戦前の日本国家の行為の責任を問うことはできないとする「国家無問責」を理由に請求を棄却した。原告側が控訴して、現在、東京高裁で審理中である。

「骨池」をめぐる「見学通路」にはたくさんのお花が並んでいた。この地を訪れた日本人の団体（労働組合が多いようだった）が捧げたものである。私たちも「献給忠魂 日本近代民衆史研究会一同」と記したお花を捧げた。旅行の共通経費から五百元を支出したものである。能書家の渡邊則雄さんによる流麗な書体である。渡邊さんは中国語を勉強していて、中国人の先生から、こうした場合にふさわしい語句として「献給忠魂」の四文字を教えてもらったそうだ。私たちは「忠魂」に「軍国主義」のにおいを感じてしまうけれど、本来は「まごころ」という意味らしい。

遺骨館から階段を上ると、右手にさらに広く長い階段があって、その先に、どんよりと

した空を背景に「平頂山殉難同胞記念碑」が屹立していた。
雨は降り続いていた。雷は少し遠のいたようだった。

*

さて、時計の針を少し後戻りさせよう。

二〇〇四年八月二四日。午後零時四五分、稲田雅洋団長以下、私たち一行十六人を乗せた中国南方航空機は成田空港を飛び立った。最初の目的地は、中国・遼寧省の省都・瀋陽（いうまでもなく、かつての奉天）である。

機中で時計を一時間戻して中国の現地時間に合わせる。瀋陽桃仙国際空港に着陸したのは午後三時二二分だった。空を飛んでいた時間は三時間足らずである。中国の飛行機なので北朝鮮上空を通った。窓から北朝鮮の大地が見えた。むろん大地に変わりはない。ゆるやかに蛇行する川があり、山には緑もあった。だが、やはり「ここが北朝鮮か」と、何か特別な思いで眺める。成田から直行すれば、わずか三時間もかからないだろう、この国。だが、そこはいまなお遠い彼方である。

入国審査を済ませると、到着ロビーで許吉星さんが出迎えてくれた。許さんにお会いするのは一九九五年八月、日中戦争終結五十周年を記念して北京で開かれたシンポジウムのおかげである。このときは病氣入院中だった私の母が死去し、急遽帰国しなければならなくなって、許さんには大変お世話になった。いまや北京市社会科学院中日関係研究センター秘書長という要職にある。しかし、いつも笑みを浮かべた温顔は九年前のままだった。

中国語を習っている渡邊則雄さんが早速、学習の成果を発揮して、中国語で挨拶をしている。この後、さまざまな場所で渡邊さんが果敢なチャレンジ精神を発揮して中国語会話の実践を試みる場面を見ることになる。「メンバー表」を見ると、私より八歳も年長である。見事な学習意欲と限りない好奇心に、いささか精神の老いを感じ始めた当方は終始、羨望の思いを禁じえなかった。

「限らない好奇心」と言えば、最年長の佐々木啓之さんのバイタリティーにもやがて驚かせられることになるのだが、ここでは少し違う話。瀋陽空港で入国審査のために並んでいたときのことだ。佐々木さんは私の少し前にいた。佐々木さんの番になった。と、入管の係員がさっと佐々木さんのパスポートを取り上げ、どこかに消えてしまうのではないかと、何が起こったのかと不安になった。佐々木さん本人も当然げげんな面持ちである。

結局しばらくしてパスポートは戻ってきて、佐々木さんも無事入国できたのだが、理由はよく分からないままだった。一種の「抜き取り調査」のようなかたちで真正かどうかパスポートを調べていたのだろうか。そうだったとして、では、一行の中で、なぜ、佐々木さんだったのか。まあその点は深く考えることまでもなく、佐々木さんご本人も含めて、なんとなくみんな納得したようだった（違うかな？）。

気温二十八度。バスに乗ってホテルに向かう。瀋陽は人口七百二十万人の大都会である。空港から市内中心部まで高速道路を走る。車の数は多い。高層マンションがあちこちに出てきている。建設中のものも目立つ。車もマンションも二年前からローンを組むことができるようになって、ずっと買いやすくなったようだ。

バスの中でそんなことを早速説明してくれたのは、ガイドの韓輝さん。福岡大学に留学していて、昨年帰国したという。今回はこのあと二人のガイドさんと出会うことになるのだが、日本語は韓さんが一番達者だった。少しハスキーな声。小柄だが、おかつ頭のよさげな髪型の、元気はつらつといった感じの女性である。

ホテルは瀋陽商貿飯店だった。シャングリラグループの大きなホテルである。ルームメイトは、森山誠一さん。

午後五時四十分、ロビーに再集合してバスで夕食を食べる老辺餃子館に向かう。店は中

街という繁華街にあるという。地図を見るとそれほど距離はないのだが、夕方のラッシュ時で道路が渋滞していて、三十分以上かかる。車が実に多い。

国際体験の少ない私だが、例外的に中国には何度か来ている。最初は一九八四年だった。北京に一泊して新疆ウイグル自治区のウルムチに飛び、二週間以上かかってホータン、カシュガルなどタクラマカン砂漠の縁のオアシス都市を車でめぐった。ホータンはまだ一般には未開放の地域だった。その後はいずれも短い期間だが、北京、大連、上海、西安、敦煌などを訪れる機会があった。そのたびに町と人々の姿の急速な変貌ぶりに驚かされて来た。

一九八四年、北京に行く人々はまだ多くは人民服だった。夜の北京駅の真っ暗な広場には列車を待っているのか、たくさんの人々が地面にごろ寝していた。行き交う大量の自転車は、およそ日本では見ることのできない「時代もの」ばかりだった。

老辺餃子館への途次、バスの窓から見ていて、原動機付きの自転車に乗っている人が多いことに気がついた。日本のように車道ではなく、歩道を走っている。スクーターのようなかたちをしているものも多い。むろん人民服を見ることはできない。町を行き交う人々の服装は色彩豊かである。

目指す老辺餃子館の道路をはさんだ向かい側にはピザハットとマクドナルドがあった。餃子館の隣は、私にはよく分からないが、何やらのブランド店である。日本の都市の繁華街と何の違もない。これこそが間違いなく「現代中国」の風景なのだろう。私たちが目にすることがない地域に「変わらない中国」があるとしても。

餃子はいったい何種類出てきただろうか。最後に出た水餃子(何か名前が付いていたけれど……)は、女性店員が鍋から一人一人の茶碗に取り分けてくれた。事前の解説によると、茶碗に入った餃子の数によって将来が占えるという。もっとも許さんの通訳で理解した限りでは、いくつ入っていても結局は幸せになるようだった。

餃子と言えば、何年前だったか、宇都宮で近代民衆史研究会の例会があったときのことを思い出す。宇都宮は有名な餃子の町である。研究会が終わった後、地元の世話役の方に餃子の店に連れていってもらった。このときは五、六種類の餃子があったように思う。数は老辺餃子館の方が多い。さすが本場の老舗。では、味は？ ウーン、これはなかなかむずかしい。老辺餃子館の餃子は蒸し餃子がほとんどである。次々に出てくる餃子をもちろんおいしく食べながら、「これぞ餃子だ」という、慣れ親しんだあの宇都宮の(つまり日本の)焼き餃子の味を思い出していたのも確かだった(老辺餃子館さん、ゴメンナサイ)。

ついでに書いておくと、この日のビールは「雪花」という銘柄。クセのない、したがって「呑みがい」のないビールだった。

*

八月二五日。午前六時半起床。天気はよさそうだ。朝食のバイキングは品数が豊富でよかった。ただし、コーヒーは苦いだけでまずかった。八時にバスでホテルを出発する。最初の目的地は遼寧賓館。満鉄が主要都市に建てた直営のヤマトホテルの一つである。当初の予定にはなかったが、佐々木さんの希望でホテルをほんの少し早く出ることにして、立ち寄った。

途中、ホテルのすぐ近くにあった瀋陽駅を車内から見る。奉天駅当時の姿をそのまま残している。ガイドの韓さんは「東京駅を模してつくった」と説明してくれた。たしかに赤レンガの壁に白い柱を配し、左右相称に広く伸びたかたちは東京駅の雰囲気似ている。

しかし、帰国後少し調べてみると、「東京駅を模して」というわけではないことが分かった。東京駅を設計したのは、よく知られているように辰野金吾(一八五四~一九一九)である。辰野は鹿鳴館の設計者として名高い英国人コンドルに学んだ第一世代の日本人建築

家である。実にたくさんの建物を設計した。「中央停車場」と呼ばれた現在の東京駅は最晩年に近い一九一四年に竣工した。奉天駅は一九一〇年に完成している。こちらの方が先なのだ。

ただ、二つの駅の関わりが深いことはまちがいない。奉天駅を設計した太田毅（一八七六～一九一一）は東京帝国大学工科大学で辰野金吾に学んだ。東京駅は一九〇三年には設計がスタートしている。着工は一九〇八年。太田が満鉄最大の駅を設計するに際して師の辰野の中央停車場設計を参照したことは十分に考えられるだろう。

辰野は英国のフリークラシックという建築スタイルに学び、赤レンガの外壁に白い石を配し、ドームや高屋根を冠する建築を数多く設計した。このスタイルは「辰野式フリークラシック」、あるいは「辰野式」と呼ばれるようになる。東京駅も瀋陽駅も、まさにその「辰野式」にほかならない。

駅周辺に赤レンガのいかにも古色蒼然とした建物がいくつかに並んでいた。「1912」という建築時期を示すのだから数字が書かれているものもある。満鉄の事務所だったようだ。

遼寧賓館は中山広場に面して建っている。中山広場の真ん中に右手を高く上げた毛沢東の大きな像があった。社会主義時代（いや、いまも社会主義か）中国といえば、このスタイルの毛沢東像が一番のシンボルだったように思う。何だか、今の中国にはひどく不釣り合いに見える。

満鉄直営のヤマトホテルの中で奉天ヤマトホテル、つまり遼寧賓館は最後に竣工（一九二七年）した。

両端に塔があり、正面はアーチ窓が並んだ廊下になっている。壁は赤レンガではなく白いタイル。古典的な落ち着きとともに軽快さも感じさせる。ロビーに入る。さほど広くはないが、歴史を感じさせる重厚さだ。ロビー左端に二階、三階へ続く階段があった。磨き上げられた木製の手すりの列が優美な曲線を描きながら上にあがっていく。かつて「満州一美しい階段」と呼ばれたそう。ソファに座ったりして、しばしフォトタイム。

ロビーの奥に「遼寧賓館（舊ヤマト旅館、鉄路賓館）成立七十五年来接待中外重要歴史人物百人録」という表題の大きな人名録が掲げられていた。トップは当然、毛沢東。そして周恩来ら中国要人が続く。周恩来の次には劉少奇、ずっと下の方だが、懐かしい（？）林彪の名前もある。変わったところでは、梅蘭芳。「著名京劇芸術大師」と説明書きにあった。欧米人もいるようだが、漢字表記だから、さっぱり分からない。金日成は分かる。日本人では秩父宮親王、本庄（「本莊」となっていた）繁、松岡洋右らがいる。一九二七年竣工で「成立七十五年」だから二〇〇二年の時点に選ばれたことになるが、「重要歴史人物」の基準はもう一つ分からない。

三十分ほどでバスに戻り、張氏帥府に向かう。かなり交通渋滞はひどい。ガイドの韓さんは生真面目な人らしく、マイクをはなさずに熱心にいろいろと説明してくれる。中国では近年、受験地獄が深刻になっているそう。エリート学校に進学するためには塾通いなどで教育費がかさむという。ときおりバスの窓から「実験中学」などと書かれた建物を目にしながら、経済の高度成長の一方で、子どもたちの間でさまざまなかたちで進行しているのだろう不平等を思った。

九時少し前、張氏帥府につく。日差しが強くなってきて、蒸し暑い。ここは、私たちにもなじみ深い張作霖（一八七五～一九二八）とその息子の張学良（一九〇一～二〇〇一）が住んでいたところである。張作霖は辛亥革命（一九一一年）の後、一九一〇年代半ば以降、奉天派軍閥を率いて東三省（遼寧、吉林、黒竜江）を実質的に支配していたから、ここは公務の場でもあった。一九一四年から建設が始まったという。

中院と東院を見学した。中院は中庭を囲んで口の字型に建物が配置される中国伝統の建築様式である四合院（ここは中庭が三つあるので、三進四合院というらしい）。東院は大青楼という三階建て王城風（？）の建物と小青楼で構成されている。中院の各部屋は展示室

になっている。最初の展示室は「張学思將軍業績展覧」だった。

張作霖や張学良は知っていたけれど、張学思は聞いたことがない。私だけだと思ったら、どうやらそうではなさそうだった。みんな「ヘーエッ」といった表情で展示を見ている（ようでした。ちゃんと知っていた方はご容赦）。

思えば、ここで少し私は混乱して、誤った理解をしてしまった。誤りの原因は単純だった。張学思なる人物を初めて知って、「張学良より前に展示があるのだから、こっちが兄貴に違いない。日本のどの本も張学良は張作霖の長男と書いてあった気がするけれど、あれは間違いか」と考えたのだ。

展示は中国語でしか書かれていないので、張学思の履歴はよく分からなかったのだが、漢字を拾って行って、次の程度は理解した。十七歳で中国共産党に加わる。抗日戦争中は軍人として活躍し、新中国成立後は人民解放軍副参謀長、同海軍参謀長などを務めたが、文化革命時に「反革命分子」として肅清された。

帰国後、いろいろな本を見ても張学思のことはほとんど出ていない。そして、張学良の方は張作霖の長男と書かれている。そうか、この重要な誤りは訂正しないとならぬと張り切った（？）。ところが、もう一度、「張学思將軍業績展覧」の最初のところを撮影してきた写真を見てみたら、軍服姿の大きな写真の下に、これも大きく赤い字で「1917 1970」と書かれているではないか。張学思は張学良より十六歳も年下の弟だったのだ。

おそまつなかんちがい話を長々と述べたが、ひょっとしたら、私と同じように考えた人がいるかも知れないので、記しておく。弟にもかかわらず、兄より先に展示があるのは、つまりは中国共産党との距離ということだろう。

張学良といえば、すぐに西安事件が思い浮かぶ。彼は父・張作霖が一九二八年六月四日、関東軍高級参謀・河本大作らの陰謀によって爆殺された後、東三省の実権を引き継ぐ。一九三六年一二月、蒋介石を西安で監禁し、国共合作を迫った。これが西安事件である（釈迦の耳に念仏？ ご寛容を）。

ものの本によると、張学良は優柔不断で「不抵抗將軍」の名があったそうだ。アヘン中毒でもあった。そんな彼がたぶん生涯に一度の大決断をして行った行為が、この出来事だったかもしれない。それが大きく歴史の流れを変えることになった。

だが、この一大決断の結果、張学良の後の生涯は悲惨なものになる。蒋介石に官職を剥奪され、台湾で長い軟禁生活を送らざるをえなかったのである。晩年はハワイで暮らしていた。もっともアヘン中毒は克服したらしく、非業の死を遂げた父や弟と違って、なんと百歳まで長生きした。

張氏帥府では執務室で仕事をしている張作霖や張学良の姿が等身大の人形で展示されていた。張作霖はかなり小柄の男だったと知る。「人形展示」と言えば、張作霖が最後の日々を過ごした小青楼という建物には着物を着た日本人女性と中国服姿の女性が対面している人形があった。

張作霖が乗った列車は奉天駅少し手前で爆破され、張作霖はほぼ即死状態らしかったのだが、この部屋の奥の寝台に寝かされ、しばらくは生きていとされた。着物の人形は関東軍某將軍の夫人で、中国服姿の人形は張作霖の第五夫人（だったかな）という。着物女性は見舞いを装って張作霖の生死を確かめにきた。これに対して第五夫人が丁重に受け答えしつつ、決してカーテンの向こうの寝台は見せない。そんなシーンらしかった。

十時十五分に張氏帥府を出て、同三十五分、九・一八事変博物館に到着。ガイドの韓さんは少しいらいしているようだった。何せ、「統一行動」が苦手な（というか、嫌いな）人たちばかりである。さっと集合して、はい移動、というようなわけには行かない。張氏帥府の大青楼でも、韓さんは上からなかなか降りてこない人たちに「よろしいですか」と何度も声をかけていた。

九・一八事変は日本では柳条湖事件として知られる満州事変の発端である。一九三一年九

月一八日午後十時すぎ、関東軍は満鉄線路を爆破し、これを中国側の仕業として、一気に軍事行動を展開した。大きな壁があって見えないが、博物館のすぐ後ろに線路が走っている。博物館は一九九二年、事件から六十周年を記念して現場近くに建てられた。二〇〇二年の七十周年には拡充されたという。

まず目に付くのは巨大な石造建築物である。卓上に置くような日めくりカレンダー型で、むろん日付は、その日が開かれている。「この屈辱の日を決して忘れまい」というわけである。

ジオラマを中心にした展示はよく出来ている。だが、たとえば、次のような日本語の説明には「どうなっているのか」とクビを傾げてしまった。

《それは日本帝国主義が武力で中国を征服する始まりでありながら、世界歴史の上で始めてファシズム国家によって起こした侵略戦争である。……無数の今となっても物凄く思わせる罪悪の記録を作り出した》

もちろん間違っているというわけではない。ただ、日本語表現としてももう少しまともなものにしてほしい。

館内で私が初めてその名を知った二人の人物について記しておく。

館内をめぐっていた佐々木さんが「ぼくはこの人の写真を見たかったですよ」と、一人の男の写真の前で感激している。抗日義勇軍として戦った人々の写真が掲げられているコーナーである。その人の名は、楊靖宇（一九〇五～一九四〇）。太い眉に口ひげ。内なる不屈の意志を誇示するかのように鋭く、正面を見据えた目。抗日義勇軍を率いて日本と闘い、最後は長白山の山中で寒さと飢えに抗しつつ、最後まで投降を拒み、日本軍に射殺された人物である。

佐々木さんは澤地久枝さんの『もうひとつの満洲』を読んで、楊靖宇その人の顔を知りたくなったようだ。澤地さんの本は先に引用したように平頂山事件のことも書かれているが、全体としては「楊靖宇追跡」とも言うべき内容である。

楊靖宇は河南省生まれ。本名・馬尚徳。北京大学を卒業して共産党に入党した。一九三六年、「満州国」で抗日軍を編成して、その総司令となった。抗日軍は、農民と協力して各地でゲリラ戦を展開した。澤地さんによると、「満州国」軍政部の内部資料『満洲共産匪の研究』は、彼について「才能、器量を兼備し、正に将たるべき人物であると言われる」と記しているという。

もう一人は女性。趙一曼（一九〇五～一九三六）。抗日闘争で捕らえられ、処刑された。博物館には彼女の生涯と息子・寧児に宛てた遺書が紹介されていた。以下は澤地さんの本による日本語訳。

《 寧児よ。母親として教育の責任を果すことが不可能になるのは、本当に心残りです。私は反満抗日闘争のために身をささげ、今日まもなく殺されようとしているのです。

生きて二度とは会えないわが子よ。どうかすくすくと育っておくれ。私は地下で心から祈っています。

私の最愛の子よ。私はお前に教えるのに千言万語をもちいる必要はない。私が身をもって生きてきたこと、それがお前に贈ることのできるすべてなのだから。

どうぞ、大きくなってからも、お前の母親が国の犠牲となったこのたたかいを忘れないでおくれ。 》

博物館を出てくると、一方通行路なのに五車線もある広い道路を隔てて高層マンション群が目に入った。淡い黄色の外壁のモダンな感じで、ほぼ完成しているようだ。

分譲価格は「一平方メートル当たり四千元程度ではないか」という。百平方メートルだとして、四十万元。一円＝十五元の換算で六百万円だから、日本の感覚では安い。ただし、中国の所得水準からすれば、やはり相当に高価な豪華マンションなのだろう。

昼食は遼寧工会大厦というホテルのレストラン。午後零時四十分、レストランを出て撫順に向かう。瀋陽から四十キロ。途中は高速道路を走った。バスが撫順市内に入ると、韓さんが「瀋陽に比べると相当に田舎でしょう」と話す。たしかに町並みはまだ古い建物が目立ち、車の量も少ない。道路は至るところで工事をしている感じだ。最初の目的地は、撫順戦犯管理所である。市内の真ん中を流れる渾河を渡って午後二時、到着。

「撫順戦犯管理所」と今でもちゃんと看板がかかった平屋の建物。中央に塔がある。この管理所には最大時約千三百人の戦犯が収容されていた。日本人だけでなく、「偽満戦犯」と「蒋介石集団戦犯」もいた。「偽満」とは中国人（満州人）でありながら、日本に協力した人々である。一九五九年から特赦が始まり、一九七五年までに全員が釈放されたという。

「在押主要偽満戦犯」の写真が並ぶコーナーのトップは「偽満洲帝国皇帝愛新覺羅溥儀」である。いうまでもなく、かの「ラスト・エンペラー」。映画でもこの管理所にいた時代の溥儀が描かれていた。自己批判文を何度も書かされていたのではなかったか。

中国では「満州国」ではなく「偽満州国」と呼ぶことは知っていた。だが、実際にこうして「偽満戦犯」だの「偽満洲帝国」の文字をいくつも目にすると、「偽」の字が放つ強烈な力を感じた。なにが「王道楽土」だ。なにが「五族共和」だ。冗談じゃないよ。「偽」の字がそう語りかけてくる。

「B、C級戦犯在各国処理人数」という表があった。これはある意味で、この戦犯管理所を公開している意味にかかわるだろう。「美国(アメリカ) 140」「英 223」「中国(国民政府) 149」などの数字が並ぶ。死刑になった日本人のB、C級戦犯の数である。一番下には「中華人民共和国 1061人 死刑・無期 無」と書かれている。

千六十一人はここだけでなく、河北省太原戦犯管理所に収容された百四十人を含む数だが、いずれにしても、「日本人戦犯に対して中華人民共和国はこんなにも寛大だったのだ。よその国と比較してほしい」というわけである。

厳しい刑に処する代わりに共産党政府が選んだのは、戦犯一人ひとりの徹底した「思想改造」だった。自分の行為を戦争犯罪と認め、そのことを深く反省しない限り、特赦は得られない。日本人戦犯は「私はこんなひどいことをしました。深く反省しています」といったかたちの自己批判書を書いた。

特赦されて日本に帰国した人々は中国帰還者連絡会(中帰連)を作って、「日中友好」や「加害証言」など、さまざまな活動を活発に展開した。管理所の一室は、そうした中帰連の活動の紹介に当てられていた。管理所の庭には中帰連が建てた「向抗日殉難烈士謝罪碑」もあった。ただし、会員の死亡や高齢化もあって、中帰連の全国組織は二〇〇二年には解散したようだ。

庭からは管理所の背後にある五階建ての建物が見えた。窓に鉄格子や網が張ってあって、尋常の建物と思えない。上半身裸の男が私たちに向かって手を振っているのが見える。どうやら刑務所らしい。

管理所を出てきたところから空模様が怪しくなってきた。

午後三時前、撫順炭鉱の西露天掘りを望むところにやってきたが、このころにはポツポツと雨が降り出してしまった。露天掘りは巨大な土色の長方形の鉢を上からのぞいているような感じである。鉢の内側は、これも巨大な段々畑が延々と続いているように見えた。だが、残念ながら、雨にけぶってよく見えない。強い風が下から噴き上げてくる。写真を撮ると、みな足早にバスに戻る。

ガイドブックによると、東西六・六キロ、南北二キロ、深さ三百メートルに達するという。

ここから次の目的地である平頂山殉難同胞遺骨館は近い。ここでのことはすでに冒頭に記した。

平頂山を出発したのは午後三時五十分だったが、瀋陽への帰途も高速道路を降りると道路は混んでいた。五時二十分、新吉興というレストランで夕食。海外を旅すると、日本では目にしたことのない食べ物にいろいろ出会う。野菜にしても魚にしても、その名前は正確に分からなくとも「野菜」「魚」ということで、まず箸は出せる。後は食べてみて、口に合うか合わないか、というだけのことだ。ところが、時おり、何だかまったく分からない食べ物に出会うことがある。この日の夕食で、それに会った。

海老や青菜などの炒め物に妙なものが混じっている。黒っぽい長さ四、五センチほどの砲弾型の物体。円形の亀裂が入っている。割れているものもあって、中身は何か黄色身を帯びている。すでに豊富な中国体験を持つ稲田さんは「これは蚕ですね」と説明してくれたものだから、もうだめだ。蚕のサナギである。少し甘みがあって香ばしいということだったが、ついに箸を伸ばす気にならなかった。韓国にもこの手の料理（ポンテギ）があると、帰国後に知った。ちなみに、この日のビールは「瀋陽ビール」。まあ、悪くない。

*

明けて八月二六日。曇り。朝食を食べてから出発まで時間があつたので、午前八時ごろ森山さんと二人でホテルを出て瀋陽駅まで散歩に行く。

途中大きなデパートらしきものがあつた。九時から開店を待つ人たちがたくさんいて、入り口の前の階段に座り込んでいる。階段やら道路に座り込んでいるというのは昔と変わらない「中国的風景」のように思える。

稲田雅洋さんと敦子さんに会ったのを手はじめに、次々に仲間たちと遭遇する。まあ、そんな時間があるわけでもないし、考えることはみな同じというわけだ。続いて会った赤上剛さんと毎沢信彦さんの二人は昨晚地下街で買ったというポロシャツを着ている。「赤上流日中友好」（つまり、ねぎりですね）が炸裂しただろう現場を思う。

道路をはさんでホテルの前に大型書店が見えたので、そこにも寄ってみた。広いフロアでなかなか立派な書店である。ただし、入るときに厳しい持ち物チェックがあるのにびっくりした。学習参考書のたぐいが多いのが目に付いた。

九時三十五分ホテル発。本日最初の目的地は、瀋陽故宮博物院。ホテルを出て間もなく、交差点を通過したところで、白バイにバスが止められてしまった。交差点内で追い越しをしたということらしい。運転手さんが降りていって、白バイの警官と話している。すると、なぜか許さんはそこに加わる。かばんから何か出して警官に見せている。

間もなく許さんがニコニコしながら戻ってきた。罰金は本当は二百元なのだが、北京市社会科学院の身分証明書を見せたら、五十元にしてくれたという。ウーン、中国はやはり「人治」の世界か。

「瀋陽清文化祭開幕式」があつたとかで、故宮周辺は車で混雑していたため、入場が少し遅れる。十時十五分、故宮の中に入る。

ここは、いわば清朝揺籃の地と言っていいかもしれない。満州族の国・後金が遼陽から瀋陽に都を移した一六二五年、創建された王宮である。一六三六年完成した。王宮の最初の主は、清朝建国の祖とされるヌルハチ（太祖、一五五九～一六二六）であり、その子ホンタイジ（太宗、一五九二～一六四三）が、ここに住んだ。

総面積は六万平方メートルという。北京故宮の十二分の一ほどの大きさになる。建物の構成も北京故宮に似ているようだが、もちろん大きな違いもあって、一つは北京故宮の大和殿にあたる大政殿が、八角殿あるいは八角亭という別名を持つことから分かるように八角形をしていることだ。ここでは皇帝の即位式など重要な式典を行う。八角形はモンゴルのテント式住居（パオ）の形であり、同時に皇帝の帽子の形でもあるという。

皇帝の帽子の方はともかく、なぜ、パオかという気がする。韓さんの説明では「大政殿を作ったヌルハチは明朝との対抗上モンゴルとの友好を重要視したから」という。満州族（女真族）の伝統的な住居はどのようなものだったのだろうか。あるいは、さかのぼればパオに似ていたのではないか。ヌルハチはこのかたちに民族のアイデンティティーを込めたということはないだろうか。

正面の二本の柱にはそれぞれ金色の龍が上に向かって巻きつき、鎌首をもたげている。これは全国統一への意志を示したものという。

瀋陽故宮は七月にヌルハチの墓がある東陵公園、ホントイジの墓がある北陵公園とともに世界遺産に指定されたばかりだ。中国人の観光客も多い。清朝時代の盛装をした若い女性を時折見かける。ガイドさんだという。

この後、後宮と鳳凰楼という三層の建物を見て、見学終わり。後宮では韓さんが「三千人の夫人がいました」と真面目に説明するのがおかしかった。むろん、これは「白髪三千丈」のたぐい。鳳凰楼は出来たころは瀋陽で一番高い建物で、皇帝らはここで町並みを見下ろしつつ、月見の宴などを楽しんだらしい。

バスに戻る途中にみやげ物の露店が並んでいる。稲田敦子さんと小林照子さんが、吹き口がひょうたんになっている笛を見つけて、「これ、おもしろそう」と買っていた。十五元。小林さんはバスに戻ってさっそく音を出そうとしていたけれど、なかなかちゃんとした音を出すのは難しそうだった。

十一時四十五分出発。昼食の前に瀋陽友誼商店に寄る。買い物にはほとんど興味のない私としては、こういう時間は持て余す。昼食は遼寧海外風味酒店というレストラン。女性店員が愛想がいい。中国に最初に来たころには、女性たちのこんな表情を決して見ることはできなかった。時代は変わった。

午後二時十五分、東陵公園着。観光客は故宮に比べるとずっと少ない。広い参道（後で購入したパンフレットには「神道」とあったが）を通過して、さらに百八段の石段をせせと上る。両側には松が茂っていて、至って静かである。正面が城壁のようになっていて、その上に三層の見事な楼閣がある。これが隆恩門。堂々たるたたずまいである。城壁のようになった部分に上って回廊をめぐるにつれて、正面の奥に草に覆われた小山が見えた。小さな円墳のようだ。これがヌルハチの陵だった。

その入り口まで来てガイドの韓さんがいろいろ説明するが、みんなあまり聞いていない。第一、ちゃんと集まっていない。統一行動が苦手な人たちは思い思いに興味を感じたところに散らばり、写真を撮ったりしている。「みなさん、よく聞いてください」と、いささかキレ気味の韓さん。扱いにくい観光客だと思ったことだろう。

午後三時十五分、東陵公園を出発して、瀋陽機関車博物館に向かう。出来たばかりといった感じの道路を走って十分ほどで着く。

博物館は二〇〇三年八月にオープンしたばかりという。室内競技場のようなスペースに蒸気機関車がたくさん並んでいる。催さんという二十六歳の男性が登場して、くわしく説明してくれた。日本語も上手だった。開館には四千万円（一円＝十五元の換算で六億円）もかかったそうだが、世界各国の蒸気機関車愛好者の寄付でまかになったという。半分は日本からだったそうだ。

残念ながら私は鉄道ファンでもSL好きでもないのに、ひょっとしたら、この博物館は「猫に小判」だったかもしれない。ただし、かの有名な「あじあ号」には私も感嘆した。

そもそも見かけが私たちのイメージする蒸気機関車と大違いだ。全体はスカイブルーの鮮やか色で、正面はゆるやかな流線型になっている。そして、ともかく大きい。直径二メートルの動輪が四つある。全体の高さは五メートル近くあるのではないか。「わーっ、大きい」と、私たちはこの日だけはみんな素朴なSLファンになって、かわるがわる「あじあ号」の前で写真を撮ったのだった。

「あじあ号」は一九三四年、満鉄に導入され、大連～新京（現・長春）間約七百キロを最高時速百二十キロ、八時間半で走った。翌年にはハルビンまで延長された。当時、日本国内で一番早かった列車の最高時速は九十五キロだった。列車内の空調設備なども含めて「あじあ号」は当時、世界レベルで見ても最高水準にあった。

しかし、「あじあ号」に感嘆しつつ、いくぶん複雑な思いがしていたことも記しておきたい。「あじあ号」は一九四三年、運行を停止した。満鉄も日本の敗戦とともに消えた。「あじあ号」は言うまでもなく、日本の中国侵略の歴史と切り離せない存在である。その「あじあ号」の水準の高さについて、いまこうして日本人の私が瀋陽の地で日本語が堪能な中国人青年から聞いている。

この博物館では蒸気機関車とは関係ないことで面白い経験をした。一時間ほど熱心に説明してくれた催青年は、その後、奥の方の扇風機が回った場に、私たちを案内した。そこには黒檀の一見立派な陳列ケースがいくつかがあって、中に陶器や香炉など、これも一見高価そうな品が並んでいる。

博物館がオープンした際に遼寧省博物館から寄贈されたものだという。そして「ご希望があれば、これを特別に皆さんにお売りします」というのだ。「ケースも一緒にして送料・保険料込み百五十万円がいい」という。私は美術品には一向に不案内だが、「いったい、こりゃなんだ」と思った。実はこの後、大連自然博物館でもまったく同じことがあった。相当地に胡散臭い感じがする。おそらく黒檀の陳列ケースも含めて、中の「美術品」はおおかた二束三文の代物ばかりなのではないか。

まあ、このことはともかくとして、瀋陽空港に向かう私たちがバスで博物館を後にするとき、催青年は外に出てきて手を振って見送りをしてくれた。なかなかの好青年ではあった。

午後五時二十分、瀋陽空港着。ここでガイドの韓さんとはお別れだ。出発ロビーの入り口で、一人ひとり握手して「再見！」。私たちを見送った後、すぐに別のグループが到着するそうだ。

瀋陽空港からは延吉まで飛ぶ。延吉の天候が悪いという。前便は着陸できずに引き返してきたといった情報もあって心配する。だが、結局、七時半に無事搭乗、四十五分に離陸して、八時三十五分、延吉空港に着くことができた。バスに乗り継いでこの日の宿泊する白山大厦には九時二十分に着いた。すぐに夕食。ここは延辺朝鮮族自治州の州都である。テーブルにはキムチが並んだ。この日はビールはやめた。

八月二七日以降の旅の報告は後に書くとして、以下、私が『通信もすと』第四号に載せてもらった一文を再掲させていただく。

この「報告記」執筆以前に別のスタンスで書いたものであるし、すでにお読みになった方もいることも承知している。だが、こうして「報告記」を書いていると、短い文章ながら、「報告記」にも記しておきたい内容であることが分かった。本来、「報告記」の流れの中に繰り込むべく書き直せばいいのだが、いささか手間がかかる気がする。『もすと』編集部の方々も含めて、お許しいただきたい。なお、冒頭に『挑水』とあるのは、『もすと』と同じく「地域の情報を語る会」が編集・発行している雑誌のことである。

× × ×

「もう一つのコリア」にて

「地域」とは何だろうか。創刊号のときもそうだったのだが、『挑水』第2号を手にして、ふたたびこんな問いが頭をかすめた。むろん辞書的な意味ははっきりしている。問いは、

この先にある。「地域」はその人にとって、どのような場でありうるのか。

八月末、旧満州（中国・東北部）の一角を旅した。旅の全体については別の文章を書くことになっているので、ここでは旅先で出会った一人の人物のことを記す。

瀋陽から延吉に入ったのは八月二六日夜だった。延吉空港で荷物を受け取るターンテーブルに立ったとき、すぐにこの地が他の中国の諸地域とは違う特別な場所であることに気づかされた。出発地と便名を示す表示がハングルと英語なのだ。

延吉は吉林省延辺朝鮮族自治州の州都である。自治州の総面積は九州より少し広い。人口約二百十八万人のうち約八十万人が朝鮮族という。

自治州では共通語は中国・北京語だが、朝鮮語は「第一言語」としての地位を認められている。だから、町の中のいろいろな表示や商店の看板もまずハングルがあって、その下に中国語が付いている。朝鮮族の人々の日常生活語も朝鮮語が主流だそうだ。

空港ではガイドの瀋松哲さんが私たちを迎えてくれた。「朝鮮族です」と自己紹介した。三十一歳。家族は妻と一歳半の女の子。祖父はソウルに住んでいたそうだ。延吉に移り住んだ時期や理由は知らないという。

日本語は東京で勉強した。日本語学校に通い、さらに専門学校で日本語と英語を勉強していたとき、郷里の父親が病気で亡くなり、やむなく延吉に戻ってきたそうだ。

瀋さんは朝鮮語も話す。だが、韓国にも北朝鮮にも行ったことはない。行くつもりもないようだった。自分が「朝鮮族（朝鮮人）」であることは自覚しているけれど、「国民」として中国にアイデンティティーを持っている。

日本語ができる観光ガイドにとっては北京や上海がいい「職場」である。ガイドでなくとも、若い人の目は中央に向いている。だが、瀋さんは延吉を離れるつもりはないという。

「延吉で一番のガイドになるのをめざして一所懸命に働きます。お金を貯めて、二年後今度は観光に東京に行きます」と決意を語る。

子どもさんのことを聞いたとき、うれしそうにかばんからキーホルダーを出して見せてくれた。かわいい女の子の写真がはめ込まれていた。「娜延」という字を書くそうだ（中国語の発音はよく分からなかった）。

聞きそびれてしまったことなのだが、「娜延」の「延」は延吉から取ったのではないだろうか。延吉で生きていくことへの思いが込められている気がした。

「朝鮮人」であることや「中国国民」であることの前に、この若い在中朝鮮人三世は、延吉という「地域」に生きる人なのだ。祖父が移り住み、父母を彼岸に送った地。彼はそこを生きる「拠点」に選んだにちがいない。

× × ×

八月二七日。午前六時起床。曇り。朝食バイキング会場は大にぎわいである。これまでのホテルと違って和食や洋食はない。赤上さんが一人で食べている。同室の毎沢さんがダウンしたという。私ももう一つ食欲がない。おなかの具合がおかしい。

七時四十分、ホテル発。きょうは長白山に向けての強行日程である。三十分も行かないうちにバスは市街地を抜けて田園地帯に入る。とうもろこし畑が広がる。そのうちとうもろこし畑が消えて水田が目につくようになった。

稲穂は十分に実っているようだった。ただ、日本の稲よりずいぶん背丈が低い気がした。背丈以外にも何か日本の風景と違うと考えていたら、稲穂がとぎれることなく続いていることだった。日本の農村では、減反であちこちが虫くい状態になっている。

五十分ほど行くと、もう山間部という感じになった。水田はもうない。八時四十分、最初のトイレ休憩。朝鮮にんじんなどを売っている小さな家の裏庭にあった。マキでお湯を

沸かして髪を洗っている女性をちらっと見ながら、トイレに飛び込む。あのまことに開放的な伝統的スタイルである。今回の旅では初めて出会った。

あれは何年前のことだろうか。敦煌などを訪れた帰途、北京まで戻ってきた。中国旅行の常というか、腹具合がおかしくなっていた。北京の瑠璃廠だか王府井だかを歩いていて急に腹痛を覚えた。トイレを探すが、なかなか見つからない。やっと、公衆トイレが見つかった。大きい方も何の仕切りもない。悪臭が漂う。ふつうの状況だったら、絶対に利用しなかっただろう。だが、そのときは風雲急を告げていた。選択の余地はなかった。

ガイドの潘さんはしきりにトイレ事情の悪さを気にしていたが、ここのトイレは伝統的スタイルではあったが、過ぎし日の北京のトイレより数段清潔だった。

十時二十分、二度目のトイレ休憩は少し奇妙な場所だった。北朝鮮政府と延辺朝鮮族自治州が資金を出し合って作ったという店である(トイレはやはり外だが)。きちんとした部屋に通されて、きちんとスーツを着こなした若い女性が「秘薬」をいろいろ宣伝をする。癌、脳卒中、エイズ、何でも効果があるという。一箱数万円と、みんなえらく高い。当然、だれも買わない。

昼食は二道白河というところの長白山賓館のレストラン(ただし、私のメモにはこうあるが、豊田文雄さんからいただいた記録には「信達飯店」とある。このころから私の体調は相当にひどくなっていたので、自信はない)。もう食事よりトイレを探す方が先決だった。

午後零時五十分レストランを出て、両側に白樺林が広がる道を行く。標高はかなり高くなっているようだ。午後一時十五分、長白山観光地区の入り口に着く。大きな門があって、この先は入山料一人八十元も取られるという。観光客はかなりの数だ。アンニョンハセヨといった言葉が飛び交っている。

長白山(朝鮮名・白頭山)は中国・北朝鮮国境に連なる長白山脈の主峰(標高二七四四メートル)。山頂にカルデラ湖の天池がある。満州族、朝鮮族の人々にとっては、それぞれの聖地である。深い山岳地帯は「満州国」当時、反満抗日ゲリラの拠点でもあった。楊靖宇の最後の戦いが、この山岳地帯の一角で行われたことは、すでに記した。

長白山までは直接大型バスではいけない。専用の四輪駆動車に乗り換え、さらに少し登る。天候が気になる。分厚い雲が空を覆っている。めでたく天池を拝むことができるかどうか。

四輪駆動車の基地までは三十分ほどだった。体調が悪いという毎沢さんがバスで待っているという。私も一瞬どうしようかと考えたが、ここまで来たのだからと、行くことにした。

四輪駆動車はトヨタと三菱。四台に分乗する。ものすごいスピードで走る。ヘアピンカーブに近いところもあるし、急な上り坂だから、いささか恐ろしかった。山頂下の基地までは二十分。途中までは森林地帯を縫って行くのだが、すぐに森林限界を超える。大きな樹木はまったくなくなる。

小さな黄色い花が時折目に入る。高山植物に違いないのだが、この方面の知識はまったくない。私のメモ帳には「高山楊貴妃」と書いてある。どなたに聞いたのか覚えていない。帰国後、いろいろ調べてみたが、その名の高山植物は分からなかった。図鑑を見ると、私の記憶にある可憐な花は「シリヒナゲシ」という名前の高山植物に似ていた。

四輪駆動車に乗ったところには雲はますます厚く、今にも雨が落ちてきそうだった。山頂すぐ下の駐車場でいったん四輪駆動車から降りて、急な坂道を登る。標高が高いこともあって、すぐ息が切れる。だが、心なしか、空は明るくなってきたようだった。さて、天池は……。

眼下に紺碧に白色絵具を少し混ぜたような色の湖面が広がる。霧というべきか。雲というべきか。湖面を渡る風に乗って、ほのかに白いものが揺れる。天池は私たちに、その姿を見せてくれた。

東西三・五五キロ、南北四・六四キロ。向こうは北朝鮮である。湖面は北朝鮮側の土色の山並みをぼんやりと写している。まこと、「聖地」の名にふさわしい神秘のたたずまいであった。

午後三時すぎ、バスの駐車場に戻る。雨が降ってきた。ひょっとしたら、私たちはタッチの差で天池の姿を見ることができたのかもしれない。

次の目的地は長白瀑布だが、雨脚が強くなったこともあって、毎沢さんら四人はバスに残った。私は腹具合の悪さに加えて、悪寒ができていたのだが、がんばって滝を見てきた。ともかく行って帰ってきたというだけなので、記すべきことはない。

この日の宿泊場所は最初に八十元の入山料を取られた門を出て、しばらくしたところにあった。五時すぎ、到着。朝鮮族民俗風情園というホテルだった。白樺林に囲まれた高原のコテージといった感じで、何棟かに分かれている。

ホテルに着いたところから悪寒がひどくなってきた。かなりの熱がありそうだ。許さんからもらった解熱剤を飲んで早々にベッドにもぐりこむ。一回分がものすごい量の漢方薬だった。だが、これは効いた。うとうと寝ていたのは二時間足らずだったと思うけれど、悪寒はおさまり、熱も(たぶん)三十七度台といった感じだ。

みんなが食事をしているところにいったみた。別棟の食堂で、ホテルの名前にふさわしく、オンドル部屋だった。日本人はやはり座って会食する方が寛ぐのか、なかなか盛り上がっているようだった。高粱酒も出ていたが、私は控えざるをえない。食堂棟の外に舞台があった。そこでこの後、朝鮮族の歌舞があったそうだが、私は部屋に戻って寝た。朝早く延吉のホテルを発ったのが「あれはけさだったか」と思ってしまうほど、ハードな一日だった。

*

八月二八日。午前八時起床。室内電話がないので、「モーニングノック」で起こされる。体調は、ぐっと改善された。腹具合の方もどうにか持ち直した。

別棟の食堂に行く。涼しい。標高は八百メートルほどらしかった。ホテルの中にもあちこちに白樺林があって、高原の涼気とともに雰囲気はとてもいい。ホテルの設備を別にすれば、なかなかの「高原リゾート」である。

七時半、ホテル発。チョゴリ姿の女性職員が二人、眠そうな顔で見送ってくれた。長白山入り口の門まで戻って、左に折れる。まっすぐな道路の両側にきれいな白樺林が延々と続く。何年前か、長野県の蓼科高原に行った帰り、「日本一の白樺林」という場所を散策したことがあったが、規模はこちらの方が数段上だろう。

最初の目的地は、峡谷浮石林。一時間十分ほどのドライブで着く。女性ガイドの案内で渓谷沿いの道を四十分ほど歩く。途中、木を組んだ橋を何度も渡る。両脇の崖にはいろいろななかたちをした岩があって、それぞれにもっともらしい名前が付いている。

「浮石」というのは、要するに軽石のことだ。火山から噴出した溶岩が急激に冷えて出来るらしい。女性ガイドがいくつか拾ってきてくれた。軽石よりは少し重かった。

浮石林を後にしてバスは往路と同じ田園地帯を中国・北朝鮮国境に向かう。丘陵の上の方に水色のシートが見える。葉タバコの畑だという。栃木県出身の稲田さん、毎沢さん、赤上さんには「懐かしい風景」らしかった。

昼食を食べたのは、安図市の土地大厦という建物二階のレストランだった。この建物はホテルではなく、日本ふうに言えば、オフィスビルのようなだった。「大厦」は「ビルディング」である。「土地ビル」という名前が、何か高度成長下の中国のバブリーな雰囲気を感じさせた。

ビルの隣に「狗肉城」という看板の店があった。「狗肉」の文字は別のところでも何度か

目にした。「狗肉館」「狗肉大鍋」という看板もあった。犬肉が朝鮮の伝統的食文化の中に含まれていることは知っていた。でも、実際に「狗肉」の字を目にすると、ドキリとする（どこかで、もう食べていたかもしれない。まさか）。

私たちが昼食を食べていた部屋の奥にあった宴会場で、結婚披露宴をしていた。のぞいてみると、正面に幕が掲げてあって「祝」以外はハングルだった。カラオケパーティーふうになっているのか、マイクを通してにぎやかな歌声が聞こえる。

二時間ほど走って、中国・北朝鮮国境の町・図們市に入る。ガイドの潘さんが「カメラはいいですが、ビデオ撮影はだめです」と、ビデオを持っている稲田さんに説明している。「脱北者の収容所」という建物があった。「いま増築しています」と潘さん。白い塀があって右手に監視塔らしきものがある。なるほど赤い三階建てとおぼしき建物の上にクレーンが乗っているようだった。

中朝国境の川・図們江（朝鮮では豆満江）は、河原は広いものの水量は少ない。図們大橋があって、向こうに北朝鮮の山が見える。何か既視感があるのは、テレビ映像を通じて何度も見ているせいだ。

図們大橋は長さ二百メートルほど。橋脚の部分が途中で色が変わっている。中国側の三分の一ほどが赤で、北朝鮮側の残り三分の二が青っぽい色に塗られている。ここが国境というわけだ。

双眼鏡を借りて、「北朝鮮」をのぞく。橋を渡ってすぐのところに金日成の大きな肖像画がある。河原にポツンと平屋の小さな小屋がある。監視小屋だろうか、三人ほど兵士らしい人間がいるのが見えた。建物もかなりある。四、五階建ての建物は集合住宅だろうか。山を登っていく道路を車が一台走っていた。全体に何か寒々とした光景に見えてしまう。山の緑も少ない気がする。先入観のせいだ。

「国境」といった字が書かれた石碑や看板がいくつもあって、みんなそれぞれに写真を撮る。「日本から来られましたか」と、相当な年配の女性が話しかけて来たが、「日本語で話しかけられても答えてはいけません」とあらかじめ潘さんに言われていたので、悪いけれど、無視する。

草に覆われた河原に一本の細い道ができています。ここを歩いて川まで行けば、水量は少ないのだから、渡河そのものは雑作もないことだろう。しかし、この川は、大げさに言えば、現代世界に存在するいくつかの「裂け目」の一つを象徴するものとして現前している。

午後三時十五分、図們江を後にする。延吉のホテルに帰る途中、熊の飼育場に寄る。なぜ、熊なのかと思ったら、熊の胆を作っているのである。「吉林省白頭山製薬有限公司」が経営している飼育場だった。千八百頭以上の熊を飼育しているそうだ。動物園のサル山のようなところに、まあたしかにわんさか小熊がいた。種類はツキノワグマという。小熊とはいえ、真っ黒な物体がこれだけ集まってちょろちょろ動いている光景は、なかなかグロテスクである。

ここはまだ写真撮影OKだったのだが、さらに進むと写真撮影はだめだという。いくつかのもの狭い檻があって、一つ一つに成長した熊が一頭ずつ入っている。胆嚢に穴をあけて熊の胆の原料を採取するらしい。つまり、檻の中の熊たちは殺されたりはしないけれど、動きもままならないまま、胆嚢に管(?)を差し込まれて、人間様の薬品となる材料を奪われているわけだ。

胆嚢の成分を採取した後、熊はもとの棲息地に戻されるそうだが、それにしても熊にとっては相当な受難ではないかと思った。

「白頭山製薬」としては、もちろん熊たちの受難を広く知らせようとする目的があるわけではない。私たちは最後に一室に招き入れられて、同社製の「熊胆粉」の試供品を提供されつつ、その効能をくわしく聞くことになる。肝臓を保護し、コレステロールを下げ、動脈硬化を予防する。中年以上の人で（特に男）で、こうした話に心を動かされない人はま

れだろう。私はなんだか昔、我が家にも来ていた「富山の薬売り」を思い出して、遠慮した。

午後五時、きのう延吉で宿泊した白山大厦に着く。きょうはここのレストランで夕食を食べる。延吉空港から瀋陽経由で大連に入る。瀋さんとは延吉空港でお別れ。

七時四五分、予定より少し遅れ離陸。機内で軽食が出た。パンとカステラ。そして、キムチのパック。さすがに朝鮮族の町である。飛行機の窓から美しい満月が見えた。

瀋陽空港でいったん飛行機を降りた。外は雨が降っている。空港の書店にヘアヌードが表紙になったビニ本があったのにはびっくりした。空港の売店では女性店員が日本語で「バイグラ、ありますよ」などと盛んに呼び込みをやっている。「白頭山製菓」では一箱二百五十元もした「熊肝粉」が同じ大きさのものが百五十元で売っていたという。こっちはニセモノ？ 何だかよく分からない。いずれにせよ、短い乗り継ぎ時間に「変わる中国」の一端を認識することになった。

大連空港に着いたのは午後十時二十分だった。朱峰さんという男性のガイドさんが出迎えてくれた。後で三十歳、独身と自己紹介があった。彼の案内でバスに乗り込み、十一時に空港を出る。大連九州華美達飯店（ラマダホテル）に着いたのは十一時半。この日も長い一日だった。しかし、おかゆ以外の食事はとらず、もちろんアルコールも控えたおかげで体調はほぼ回復した。

*

八月二十九日。モーニングコールは午前六時半。昨晚、遅かったし、出発は九時半の予定だ。ルームメイトの森山さんと「もう少し寝よう」と合意して、一時間近くウトウトする。

朝食のバイキング会場は延吉と打って変わって、欧米人が四分の一ぐらいいる。隣の母親と男の子が話しているのはロシア語だった。十六階の部屋に帰って窓から下を眺めると、大連駅がそこにあった。瀋陽駅は前に書いたように東京駅に似ているが、こちらは上野駅だという。なるほど、上野駅の駅舎よりずっと横幅は広いが、よく似ている。一九三七年竣工。近年リニューアルされたという。

九時四十分、バスで旅順に向かう。曇り空。大連には前に一度来たことがあるのだが、そのときは旅順には入れなかった。軍港など軍事施設があるというのが理由だ。

近代民衆史研究会は一九九五年、北京で開いたシンポジウムの後、旅順を訪れている（私は前に書いたように北京から急遽帰国したため参加していない）。このときは公安当局との交渉など大変だった、と稲田さんから聞いたことがある。二〇三高地からの写真撮影など厳しい制限があり、現地には監視員もいたそうだ。

許さんによると、その後も公安当局の許可が必要だったのだが、近ごろは届け出だけでよくなったという。それでも全員の名簿を提出し、あらかじめ行く場所を限定されるそうだ。

バスから大連の町並みを見ながら、何かゆったりとした安心感みたいなものが込み上げてくる。延吉はむろんのこと、瀋陽でも、決して感じることのなかった思いである。

大連（当時はダーリニー）の街づくりはロシアによって始められた。パリにならって広場を中心にしたプランだった。日露戦争後、日本がそれを受け継ぐ。現在は高度経済成長を突き進む中国の代表的な都市の一つである。日本など海外企業の進出も多い。奇抜なデザインの建築物がたくさん見られる。広い道路と整然とした町並み。中国の都市といえば、どこにでも付き物の自転車が見られない（市内中心部への乗り入れは禁止になっているそうだ）。

始まりから現在まで、ある意味で、都市・大連は徹底して「非中国的」と言っているかも

しれない。その「非中国的」に接して、私は安心感を抱いている。たぶん、日ごろ私が生きている空間と「大連」が「西欧」をはさんで地続きだからだろう。この地続き感覚は今回の旅で通過してきたどの場所でも感じることはなかった。

そんなことを考えながら町並みを見ているうちに旅順南路に入る。青空が広がってきた。十時十五分、二〇三高地の入り口に着く。いまここは「二〇三景区」として「国家森林公園」の一角になっているのである。入り口で「駕籠屋」さんがたくさん客待ちしていた。長い棒が二本あって、真ん中に客が座る駕籠がある。二人で担いでいくわけだ。頂上までは百元だという。三十分ほどの登り道だから、けっこう利用者はいるようだった。全員(?)若い私たちはもちろん駕籠など使わない。

頂上に上る前にプレハブづくりの「二〇三高地陳列館」に入る。当時の写真などが展示されていた。乃木希典の写真の説明には「侵華罪魁」の四文字が冠してあった。

頂上に登ると、かなりの人であふれている。絵葉書などを売る店もいくつか出ている。つまり、ふつうの観光地である。九年前に監視員の目を気にしながら、この地に立った何人かの人は雰囲気の変わりように驚いていた。もっとも旅順港を見下ろす展望は変わらない。写真もビデオもOKだ。

ロシア軍の旅順要塞を攻撃する戦略的要衝だったことは、こうして展望してみるとよく分かる。天気はすっかり回復していた。旅順湾も一望できる。市街地の向こうに強い夏の日差しを受けた海面がきらきらと光っている。両側から半島が迫り、湾口は本当に狭い。「軍神広瀬中佐」を作りだした旅順港閉塞作戦が行われたわけだ。

「爾靈山」と書かれた砲弾をかたどった慰霊塔は一九一二年に建てられた。「日露戦跡ツアー」のハイライトとして、多くの日本人がこの地を訪れた。

二〇三高地の名前は、この地の標高に由来する。その音を借用して「爾靈山」と名づけたのは漢詩人としての乃木だった。慰霊塔の字も彼の揮毫による。そういえば、その漢詩が「二〇三高地陳列館」に「反動詩句」として紹介されていた。

爾靈山嶮豈難攀
男子功名期克艱
鉄血覆山山形改
万人齊仰爾靈山

二〇三高地をめぐる日露両軍の最後の攻防戦は一九〇四年一月二七日から始まって二月六日に終わった。鉄血山を覆うて山形改まる。それはまことに悲惨な戦いであった。たとえば、第二回目の攻撃。

「二十九日から三十日にいたる二〇三高地の攻防戦の惨況は、言語をもってこれを正確につたえることは不可能であろう。千人が十人になるのに、十五分を必要としないほどの損耗だった」

(司馬遼太郎『坂の上の雲』)

百年前、日露両軍の兵士たちの膨大な量の血を吸っただろう地は今、観光客であふれ、平和な喧騒のうちにある。ついこの間まで厳しく管理されていた地は、改革開放経済のもと外貨をかせげる「観光地」として甦ったようだ。

下りは登ってきた道と別の細い道を行った。途中、「乃木保典君戦死之所」と書かれた石碑があった。保典は乃木希典の次男である。ロシア軍の塹壕跡もあった。

「乃木保典君戦死之所」の石碑には、この九文字以外何も書かれていなかった。まことにそっけない。『坂の上の雲』には、たしか乃木保典少尉が戦死した状況はよく分からないと書いてあったような気がするけれど、場所は特定できたのかな、と考えながら、決して戦没地に石碑など建てられることのなかった膨大な死者を思った。

日露戦争における日本側の死傷者は二十二万七千人(うち戦死者八万四千人)で、ロシ

ア側の死傷者は二十七万人(うち戦死者五万人)。旅順攻撃戦で死んだ日本の陸海軍将兵は二万三千人。赤上剛さんのご先祖に、この二万三千人の一人がいるそうだ。

この稿を書いている途中に届いた『通信もすと』第五号(「地域の情報を語る会」発行)に、赤上さんが「百年前、60年前の“戦死”」という文章を寄稿している。それによると、赤上さんの祖父のまた祖父にあたる人が二〇三高地で戦死したという。この話を赤上さんは祖父の兄に当たる人(大伯父)から聞いていたという。

赤上さんは二〇三高地で拾った赤い小石を日本に持ち帰った。九月になって帰郷したその日、ご健在の大伯父さんが卒塔婆を持って自転車に乗っているのに出会った。「二〇三高地の小石を持ってきたよ」と報告すると、大伯父さんはなんと「ジイ様の百回忌を明日やんべと思って、今お寺から卒塔婆をもらってきたところだよ」と言うではないか。以下、赤上さんの文章から大伯父さんの言葉を引く。

「そらジイさん喜ぶべえ。百年前のことだもの、村じゃ俺しかこんなこと知んねもんな～。戦死しても誰にも忘れられちまって……。百年忌ができてよかったよ」

赤上さんの故郷は栃木県中川村(現在は茂木町)。村の入り口には日露戦争戦死者の顕彰碑が建っているそうだ。「戦没地に石碑など建てられることのなかった膨大な死者」とさきほど書いたけれど、思えば、彼らに対しては日本各地にそれこそ膨大な量の顕彰碑が建てられたのである。

二〇三高地からバスに乗ってわずか十分ほどで水師営に着く。水師営は村の名である。日露戦争当時はむろん、何の変哲もない小さな村だったのだろうが、いまや「観光地」としてにぎわっている。高層マンションもかなり建っている。

日本軍はここにあった一軒の農家を野戦病院にしていた。そこが日露将軍の会見所選ばれた。一九〇五年一月五日のことである。

いちおう戦後生まれの私だから学校で習ったはずはないのだが、「水師営の会見」と言えば、次の歌詞を思い出す。

旅順開場 約成りて
敵の將軍 ステッセル
乃木大将と会見の
所はいずこ 水師営

佐佐木信綱作詞、岡野貞一作曲の文部省唱歌。一九一〇年に作られた。歌詞は「庭に^{ひとつと}一本^{なつめ}の木ノ弾丸あとも いちじるくノくずれ残れる 民屋にノ今ぞ相見る 二將軍」と続く。

そこにあったのは平屋だが、壁の半分ほどしっかりと石組みもある立派な建物だった。屋根に草が生やしてあって古い感じを出しているけれど、一見して最近の建物であることは分かる。当時の写真を見ると、家の前にすぐ石組みの塀があるが、ここは同じような塀はあるものの、それなりの庭があって、その先に建物がある。

「くずれ残れる民屋」はその後どうやら生き残っていたらしいのだが、文化革命中に破壊されたという。一九九五年になって、地元の人々が再建し、翌年から観光スポットとして公開されるようになったそうだ。庭には唱歌にも出てくるし、よく目にする乃木とステッセルを囲んだ日露の軍人たちの記念写真に写っているナツメの木があったが、これは三代目ということだった。

中に入ると相当に年配の男性が写真を長い棒で指しながら、説明してくれた。流暢な日本語で、説明も分かりやすい。聞くと、七十六歳で、日本語は「小学校で習った」ということだった。

そこで写真集を二冊買った。「日本軍の砲火で破壊された旅順市内の民家」「うちこわされた農村の家屋」「村は廃墟になった」「無辜の中国国民が日本軍にスパイと見られ殺害された」といった説明を付した写真があった。これらの写真は水師営会見所にも掲げてあっ

て、説明の老人は「日露両軍が戦った場所は中国であり、そこには大きな被害を受けた貧しい人々がたくさんいたのです」ときっぱりと語っていたのが印象に残る。むろん乃木でもステッセルのものでもなく、さらにこの地で戦死した多くの日本人のものでもない、もう一つの「旅順」。

会見に使われたという机も展示してある。長さが二メートル近くあって、野戦病院で手術台として使われていたという。会見の際にこれに白布をかけたそうだ。「第一師団衛生隊 隊長横川徳郎識ス」として、その辺りのことが楷書で大きく墨書されている。文化革命時に家が破壊されてしまったというのに、どうしてこの机が残っているのだろうか、少し意地悪な疑問を持った。

帰国後調べてみると、私の抱いた疑問はあながち見当はずれでもなかったようだった。乃木希典が住み、夫人とともに明治天皇に殉死した場所でもある邸宅は、港区乃木坂に区立公園として保存されている。そこに机の「実物」があるらしいとの情報を知った。その後何も調べていないが、もし私たちがみたものが「レプリカ」ならば、よく作られていたことになる。

昼食は水師営会見所に隣接した安道賓館。午後一時五分、バスに戻って大連自然博物館に向かう。同四十分着。この博物館はもともと満鉄私設調査所が集めた収蔵品を受け継いだものという。立派な博物館であった。とりわけ鯨の標本や恐竜の骨格見本などは、その巨大さに圧倒された。ミイラもあった。前に書いたように、ここでも最後は「美術品」の黒檀ケースごと販売だ。どうも、中国の博物館ではヘンなものが流行しているようだ。

二時十五分に博物館を出て、十分ほどで星海公園。広々とした海浜公園だった。日差しが強い。いろいろなモニュメントがある。海側に向かって銅版をはめ込んだ長い通路があって、足形が付いている。一九九九年、大連市が出来て百年を記念して千人の足形を集めてつくったという。大連の発展の歩みを文字通りの歩みで象徴するねらいだそうだ。一番手前の方にひときわ小さな足形があって、ガイドの朱さんが「纏足した女性です」と教えてくれた。

海のすぐ近くには大きな本を海に向けて開いたかたちのモニュメントもあった。新しいページを開くという意味が込められているのだろう。私たちの仲間でも上まで（つまり、開いたページの端まで）登っている人もいたが、私は遠慮した。

たくさん的人が出ている。思えば、日曜日だ。自転車を見かけないということは前に書いたが、星海公園ではマウンテンバイクに乗った若者を目にした。

三十階もあろうかと思う高層マンションが四棟ほぼ完成しているのが見えた。いずれも同じデザインで、屋上に城の望楼のような塔が二つ伸びている。さらにその背後の丘には、これは文字通りお城のような建物がどんと鎮座している。こちらは美術館という。マンションは温泉つきで、日本円で一平方メートル十三万円以上と聞いた。百平方メートルで千三百万円。日本の感じではまだ安い、瀋陽の高級マンションの倍以上の価格である。

大連の中心部まで戻ってきて、みやげ物店に寄った後、午後四時すぎから自由時間になった。私は体調もよくなったので大連をできるだけ歩いてみようと思った。

出発地は大連賓館（旧大連ヤマトホテル）である。前にも書いたようにヤマトホテルは満鉄直営のホテルの総称だが、一九一四年竣工の大連ヤマトホテルはその中でも格式が高かったという。

正面は三層になっていて、一階（第一層）から二、三階部分（第二層）を大きな花崗岩の半円柱八本が貫き、四階（第三層）に続く。典雅にして重厚。堂々たるたたずまいである。設計者は分かっていないが、その完成度から考えて奉天駅（現・瀋陽駅）を設計した

太田毅が当たったと考えるのが至当という。瀋陽を離れて三日、私はふたたびこの地で、夭折した天才建築家に出会うことになった。

大連賓館からかつては単に大広場と呼ばれた中山広場をはさんだ正面は、旧横浜正金銀行大連支店である。現在は中国銀行遼寧省分行。一九〇九年竣工。中央に大きなドームがあって、左右にも小ぶりのドームがある。辰野金吾とともに明治期日本を代表する建築家の一人である妻木頼黄が基本設計を行い、太田毅が現地で実施設計を担当した。

このほか、旧名をあげれば、大連民政署、関東通信局、大連市役所、東洋拓殖大連支店などの洋風建築が広場を取り囲んでいる。素人の私にはくわしい建築様式など分からないが、それぞれに特徴があって見飽きない。大連賓館をはじめいずれも「大連市重要保護建築」のプレートが張られている。指定は二〇〇二年一月である。

中山広場から南、解放路のゆるやかな坂道を登っていくと、左手に大連鉄路病院があった。満鉄が経営した大連医院本館である。これも重厚なレンガづくりの建物だ。地図を見ると、相当に広い敷地を占めている。

解放路をさらに登っていき、七七路を左折した。プラタナス（残念ながらアカシアではない）の並木道が続き、車はほとんど通らない。このあたりは日本統治時代、高級住宅街だったとガイドブックにある。

なぜか道の右側は大きな新築の住宅が続き、左側は古びた建物が多い。新しい住宅はまだ空いている家が多いようだった。古びた方は痛んでいるが、往時をしのばせてくれる。私のボキャブラリーで言うと、「西洋館」ということになるだろうか。今では一軒の家に何家族も住んでいるようだった。玄関の外でマージャンをしている人たちがいた。

この後、地図に児童公園と書かれたところを通って、魯迅路に入る。児童公園は芝生が広がり、池もあって気持ちいいところだった。だが、子どもの姿はなく、中年の男女のグループがあちこちでトランプに興じていた。

魯迅路は日本統治時代、山県通りと呼ばれた。途中、満鉄本社だったビルを見る。路面電車が走っていた。

日本橋やロシア町にも入ってみたかったが、もうさすがに疲れた。二時間近く歩き詰めだ。地図を見て、最短距離でホテルまで戻る。ただ途中、大型書店のビルがあったのでちょっとだけのぞいた。紀伊國屋もびっくりという感じの大きな店だった。最初に中国に来たころは書店といえば、照明の暗い新華書店だけで、並んでいる本は粗末なものばかりだった。文字通り、隔世の感である。

皆さん思い思いの自由時間を過ごしたようだったが、いささか取材のパワーもなくなった。午後六時半、ホテルロビーに集合して五十分に夕食会場に着く。凱樂酒店三階の大きなVIPルームだった。全員が一緒にする最後の食事。そして、秘書長として終始面倒を見てくれた豊田文雄さんの誕生日でもある。そのお祝いのパーティーをかねて、旅行をしめくくる晩餐会になった。

大きな部屋で部屋専用の、しかもちゃんとした清潔なトイレが付いているところなど、さすが大連という感じだ。最新のDVDカラオケの設備もあった。

しかし、このカラオケが困りもので、店にしてみれば自慢の設備だったのだろうし、日本人はみんなカラオケ大好きと思っているのか、ウエイトレスが大きな音量で、これがかかる。稲田さんが大きな声で、私には分からない中国語を叫ぶと、ウエイトレスがやっと止めた。

皆さんが旅行の感想などを一言ずつ語った。先年、ご主人を亡くされた高橋良子さんが「いつも一緒だった夫のいない旅で……」と言って絶句された。でも、たぶん心の中では

いつも一緒だったのだと思う。今度も、そして、これからもずっと。

高橋さんの仲良し小林照子さんは、私を含めて体調をくずしがちだった男たちを尻目に終始元気一杯に好奇心を発揮していた。初めての中国だったそうだ。

渡邊さんの草笛の伴奏で「北国の春」と「里の秋」をみんなで歌う。「北国の春」は中国でも大ヒットした歌だ。ウエイトレスがふたたびカラオケをかけたので、稲田さんが叫ぶ。

続いて許さんが特別に注文してくれたバースデイケーキが登場した。これはなかなかの「優れもの」だった。ろうそくに火をつけると、花が開いて花弁にも火がつき、ハッピーバースデイ・ツー・ユーが流れる。

最後に赤上さんが例の「もしもしかめよ」を歌い、許さんが「長江之歌」で応えた（ここで、カラオケは少し役立った）。こうして、中国最後の夜が暮れた。

*

八月三〇日。五時四十五分起床。六時三十五分にホテルを出発。大型で強い台風十六号の九州接近が伝えられていたが、快晴だった。大連空港を八時二十分に離陸して、台風の影響もなく、日本時間午前十一時五十分、成田空港に着陸した。午後零時三十五分、全員荷物を受け取ると、その場で「解団式」。

こうして旅は終わった。

旅の始まりは、瀋陽。経済発展のなか、そこには「新しい中国」があった。一方、その地は満州事変が起きた場所であり、隣接の撫順では平頂山事件があった。一九三一年と三二年の出来事を私たちは反芻することになった。

長白山と天池では悠久の自然の流れを感じる時間を過ごした。

延吉から長白山への往復は「変わらない中国」を瞥見するものであったかもしれない。

朝鮮族自治州の街・延吉では「さまざまな中国」の一つの現実に接した。北朝鮮との国境では、いま、この時代の厳しい国際情勢へ思いをはせざるをえなかった。

旅の終わりは、大連と旅順。百年前の「日本国家」に、そこで私たちは出会うことになった。百年目の「日本国家」を観光化する中国のしたたかさをも感じた。新しいマンションが林立し、奇抜なデザインのビルが建つ大連は、瀋陽以上に「新しい中国」の様相を突出したかたちで教えてくれた。

私にとって、今回の旅は歴史をいくども行きつ戻りつするものだった気がする。

【追記】ながながとしかもだらだらした「報告記」になってしまいました。帰国して印象が鮮明なうちに書けばよかったのですが、どうも「締め切り」間際にならないと書く気になれません。ということで、旅程はできるだけ正確に記したつもりですが、参加された方々のご様子にはあまりふれられないままでした。ご寛容下さい。稲田雅洋さんには「私記」、豊田文雄さんからは「記録」をお送りいただきました。文中でいちいち注記していませんが、大いに助かりました。ありがとうございました。また、現地でお世話になった許吉星さんには心行き届いたお世話をしていただきました。この場を借りて御礼申し上げます。（二〇〇四年一月二九日）

